

淡路島の体感型SDGs研修

(公財) 日本修学旅行協会 理事長 竹内 秀一

JR新神戸駅から車で高速道路に入り、明石海峡大橋を渡るとおよそ40分で淡路島に着く。さらに内陸部を南西に向かつて15分ほど進むと、不思議な形をした白い建物が見えてくる。その周りは、私たちから見れば雑草が生い茂った野原のようだが、実は、ここがSDGs研修が実施されている農地「Seedbed」なのだ。研修を運営する(株)パソナ農援隊の事業部・タネノチカラは、農業の素人といつてよい元サラリーマン4名が、淡路島に移住して2018年に立ち上げたもの。現在は、5名のスタッフがSDGsを踏まえた農業に取り組んでいる。今回、そのSDGs研修の一端を体験させていただく機会を得たので、それについて報告したい。

「循環」「共創」「多様性」がキーワード

研修は、3時間プランと5時間プランの二つが基本型。3時間プランでは、はじめにスタッフが講師となって進める「セミナー」(60分)を受講する。その後、スタッフが日常ここでどんな活動をしているのかを実際に見てみる「フィールドツアー」(60分)、そして「循環」の視点

を重視した農をベースとする「体験ワーク」(60分)と展開されていく。5時間プランでは、これに自己認識と他者理解をめざす「グループワーク」(60分)と「振り返り」の時間(60分)が加えられる。

事前・事後の学習へのサポートも、別料金にはなるが、学校に向くか、またはオンラインでの講義というかたちで行っているという。事前学習でセミナーの部分が実施できれば、現地での体験活動の時間を長くするなど、研修内容は学校のニーズに合わせてアレンジできるそう。

タネノチカラの立ち上げにも携わったスタッフの一人、奥田悠美さんからプログラムのねらいについてお話を伺った。

「SDGsでは、自然や『循環』ということを大切にしているが、そもそも



アースバッグハウス (後ろは農家レストラン「陽・燦燦」)

それは何なのだ、ということを実感して、自分事として捉えられる人を増やしていきたい。この研修を考えた。研修では、『共創』と『多様性』も重視している。共創とは、人間同士だけでなく虫や土、水や雑草などとの共創でもあるので、それを体感してほしい。

セミナーでは、グローバルな課題と自分たちの繋がりを認識することをねらいとしている。とくに、そのための『問い』を提供することに重点を置いている。フィールドツアーでは、スタッフがここで実際にやっていることを見て、『問い』として自分の生活にどう落とし込めるかを考えてほしい。体験ワークでは、フィールド自体をつくる過程も『共創』として体験してもらうとのこと。

不思議な形の白い建物は、ここにやって来た高校生たちがスタッフと『共創』する体験ワークとしてつくったもので『アースバッグハウス』と呼ばれる。この土を詰めた土嚢を積上げてつくっているの、地震にも悪天候にも強い、持続可能な建築物だそう。

タネノチカラ代表の金子大輔さんからは、こんなお話を聞くことができた。

「ここでの研修を体験した

学校のなかには、校庭の一角に自然農園を開いたり、給食の残飯を利用してコンポストをつくったりと、学びをここで終わりにしない、戻ってから継続しているところがある。この研修での体験を通して生徒たちが抱いたやりたくなる気持ちや、モヤモヤした気持ちを持ち帰っていくことも大事だ。

セミナーでは、たとえば、雑草と野菜との違いを生徒たちに訊いてみる。雑草は食べられないのか？ 無農薬・無肥料で、しかも耕作もしないで野菜はできるのか？ といったように、当たり前のこととを改めて問い直してみる。いろいろな





タネノチカラ代表の金子大輔さん

答えが返ってくると思うが、大切にしているのはそれらを否定しないこと。これが正解なのだ、とはしないことで、それぞれが自分なりに考えてみるのが重要だと思っている」と。

お二人の話から、この研修の柱は、SDGsを考えるための「問い」を提供することであると理解できた。

セミナーで伝える3つのポイント

セミナーでは、必ず次の3つのポイントが押さえられる。

一つ目は、地球の温暖化について。2021年に開催されたCOP26で合意された「産業革命前からの気温上昇を1.5℃に止める」という世界目標に触れ、このまま温暖化が進むと60〜70年後には平均の最大瞬間風速が90m/秒、新幹線と正面衝突するのと同じくらいの衝撃力をもつスーパー台風が来ること。す

でに1.1℃上昇して、2030年には1.5℃の上昇になってしまいうことを示し、今、自分に何ができるかを

考えてもらう。

二つ目は、土について。土は何でできているか、と問いかける。分解された有機物や破碎された岩石からなる土は、人間の衣食住すべてを作っているといえる。

2015年には、地球上にあった土の3分の1が劣化して砂やドロとなり使えなくなった。今のペースでいけば60年後には土が失われてしまう。10年後、20年後の世界は、今生きている我々が作り出しているということを認識し、これを自分事として捉えてもらう。

三つ目は、日本の食料自給率について。現在の日本の食料自給率が37%であることと実感しているか、と訊いてみる。自給されている食料も、その99.8%は農業や化学肥料を利用した慣行農法でつくられている。農業も化学肥料もほぼ100%が石油に依存してつくられているので、本当の自給率は0.2%に過ぎない。であるなら、日本は国として自立しているといえるのか。このことを各自に考えてもらう。

セミナーでの講義は、この3つのポイントを中心に、生徒たちとやり取りしながら進められていく。生徒たちはここで提供された様々な「問い」について考えながら、次のフィールドツアーに向かう。この体験活動では、生きるために最も必要な「食と健康」であること、そして「タネとツチ」さえあれば食料はつく

れるということを実感してもらうのがねらいとされる。

フィールドを歩いて体感するSDGs

フィールド全体の面積は、およそ3.5ha。ここにあった農地が、台風で大きなダメージを受け耕作が放棄されたことから、その土地を借りて開墾したということ。ここで注目したいスポットをいくつかあげておきたい。

○レイズドベッド 木枠で囲まれた中に、去年育てた夏野菜が枯れたままの状態になっている。はじめ木枠の上端まであった土が、減っているのはなぜ？ 減った土は植物の体となった。植物が枯れると分解されて土に戻る。それが「循環」ということ。



レイズドベッド

○畝に置かれた石 畑の畝の上にくつもの石が置かれているのはなぜ？ 石の下には虫やそれを食べる生きものが棲息する。植物の体の3〜4割は虫に食べさせるためにある。虫や生きものの糞は土になり、また糞に含まれるリン酸は、植物が実をつけるための栄養素になる。

○ハコベの群生 雑草であるハコベがそのまま放置されているのはなぜ？ ハコベは、野菜をはじめ多くの植物が嫌う酸性の土壌を、中性（弱酸性）にする性質を持つ。ハコベは除かなくても、土壌が中性（弱酸性）になると自然に他の植物に代わる。

フィールドには、多種多様な雑草が生い茂っているが、野菜はそれらの間で作られている。肥料や農薬を使わず、基本的に耕作もしない。水も、ほとんどは雨水や植物につく朝露だけ。それなのに野菜は育っている。私たちが知っている、美しく整備され雑草など二つも生えていない畑の姿との、あまりの違いに驚かされる。自然の持っている力の凄さ、「循環・多様性」の意味が体感できるフィールドツアーだ。

「循環」「共創」の体験ワーク

様々な「共に創る」作業が、「体験ワーク」として用意されている。フィールドにはまだ開墾が必要な土地が多く残されていて、ほとんどが竹やぶになっている。それを伐採して農地にしていく作業。発酵させたウッド・チップをフィールドに撒いて土を作る作業など。このような農をベースとした体験活動のほか、飼っているニワトリの世話や火打石を使って火をおこすといった作業もある。ここで行われている「体験ワーク」は、金子代表が

いう「農」は、生きていくために必要なものを自分自身でつくる」ことを基本とした活動なのだ。

このところ、農業による「自然環境の劣化」という問題が取り沙汰されるようになっていく。たしかに、化学肥料や農薬の大量投与、遺伝子操作を施した作物の栽培など、自然を傷つけてしまうような農法の拡大には疑問がある。自然の循環や多様性が壊れてしまえば、もはや農業はできない。生きるために必要な食料を得る手段としての農業が、持続可能な生産活動であるためにはどうしたらいいのか。このSDGs研修は、それを探究課題とする「学び」だといえるだろう。

この研修を実践するうえで

現在、ここで一度に受け入れられる人



全長約120mの実物大ゴジラの体内に突入できる
ニンゲンノモリゴジラジップライン
TM & © TOHO CO., LTD.

数の上限は100名。規模の大きい学校は2つのグループに分け、ここから車で10分ほどのところにある「ニジゲンノモリ」でのアクティビティと組み合わせ、交互に実施することが多い。

「ニジゲンノモリ」は、ドラゴンクエストやゴジラ、クレヨンしんちゃんといった生徒たちにも人気の二次元コンテンツを、淡路島の自然を活かした野外アクティビティで体感できる大規模なパーク。しっかりと内容の研修と誰もが楽しめるアトラクションとを組み合わせたメリハリのきいた行程とするのもよいのでは。

また、タネノチカラの農地に隣接したパナソニックが運営する「Awaji Nature Lab & Resort」内には、**農家レストラン「陽・燦燦」**がある。ここでは、契約農家が提供する地元産の食材を使った「地



のじまスコア

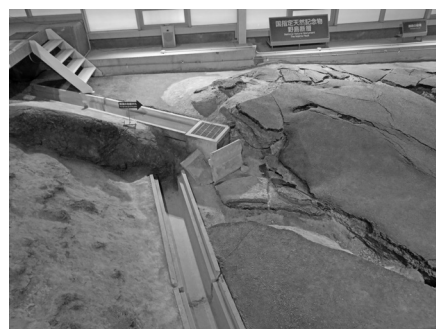


農家レストラン「陽・燦燦」

産地消」のランチが食べられるので昼食に利用したい（一度に100名の利用が可能）。また、世界的に著名な建築家・坂茂氏の監修によって設計されたこの建物の、再生紙を使った「紙管」でつくられているという柱も見ておきたい。

淡路島は、これまでは洲本を中心とする中部や鳴門のうず潮が見られる南部が観光の中心で、修学旅行でも四国に渡る中継地とされることが多く、北部にはあまり目が向けられてこなかったように思う。しかし、今、北部には明石の海を臨む西海岸沿いに、洒落たレストランやカフェなどが立ち並び、多くの若者が訪れる人気のスポットになっている。また、廃校になった小学校をリノベーションして、レストランと地元の野菜や土産物などを販売するマルシェとした「のじまスコア」では、地方創生を考えるセミナーやワークショップを実施していて、各自自治体からの問い合わせも多いという。修学旅行でもぜひ立ち寄ってみたい。

そこから少し足を延ばすと北淡震災記念公園がある。公園内にある「野島断層保存館」は、1995年の兵庫県南部



保存されている野島断層

地震（阪神・淡路大震災）で生じた野島断層を、そのままの姿で保存・展示している施設だ。コンピューターで再現された地震を体験できる「震災体験館」もあり、防災・減災学習の場として活用できる。

コロナ禍と新学習指導要領の実施を背景に、修学旅行での学びの内容や旅行先の多様化が一層進む傾向にある。学校には、ぜひ、淡路島を「探究的な学び」なかでもSDGsを学ぶ場として訪れていただくことを期待したい。

【問い合わせ先】

株式会社パナソニックグループ 事業開発部
観光営業プロジェクトチーム（担当：一ノ瀬）

淡路市夢舞台2番地展望テラス
TEL：050-3684-4245